

論 説

アルゼンチン社会の悪循環

——ビベサ・クリオージャと国の不統一（その一）——

阿 部 清 司

はじめに

- 1 経済成長と公民意識
 - 2 汚職の容認と悪循環
 - 3 悪いガバナンス……制度的能力の未発達
 - 4 Viveza Criolla（ビベサ・クリオージャ，民族的ずる賢さ）の悪循環
- 以上は（その一）
以下は（その二）
- 5 優先する習慣，空論の悪循環
 - 6 貧困の悪循環と南北格差
 - 7 教育の荒廃と悪循環
 - 8 三権の未分立と人治主義
 - 9 憲法に帰れ……悪循環から抜け出す方法
 - 10 結論

はじめに

アルゼンチンに暮らし始めると、誰でも日本との違いの大きさに驚き、やがて「社会がうまく機能していないのではないか」と思う。アルゼンチン人と共に仕事をするとなますますそのように思う。これからアルゼンチンで仕事をしようという後継者のために、私の現場での経験を踏まえ、見聞と観察と考察をまとめたのが小論である。

本論文は以下のような質問に答えることを目的にしている。

「世界には4つの国がある。先進国と途上国と日本とアルゼンチンである。」と言われるが、資源が豊かなこのアルゼンチンが特殊な途上国として停滞しているのはなぜか。

2001年の経済危機の後の反省は生きているのか。

アルゼンチン人の考え方はどのように独特であるか。

習慣や理論は人々の日常生活でどれほど大切か。理論と実践との関係はどうか。

経済成長と公民意識の間にはどんな関係があるか。

汚職や不正がなかなか減らないのはなぜか。相互不信や政治不信の弊害はどうか。

制度的能力はどの程度か、ガバナンスが悪いのはなぜか。

疎外された貧しい人々はどんな悪循環に陥っているか。

教育はどうか、どんな悪循環に学校の先生は陥っているか。

政治における三権分立の現状はどうか。

アルゼンチン社会が種々の悪循環¹⁾から抜け出すにはどうしたらよいか。独立から200年近くたった2008年でも国論の統一がないのはなぜか。どんな解決方法が考えられるか。

本稿はJICAシニア海外ボランティア（Senior Volunteer（SV））としてアルゼンチンに赴任し国立ラプラタ大学国際関係論研究所大学院でアルゼンチン経済と比較した日本経済論を教えていたころ（2005～2007）に現地ですぐ得た情報に基づく。JICAのSVの派遣期間は2年間であるが、

1) 悪循環に注目する手法は他でも採用されている。例：阿部清司『タイ経済病と自助努力』千葉大学経済研究叢書3，1999，第6章 悪循環，三重の危機，メキシコとの比較。

このような短期間は利点も持つ。それは印象の新鮮さを保つのにふさわしい期間である、ということである。10年も現地に住んでいると、すべてが当たり前のことに思え、印象の新鮮さを失う。事件が起きても、「ああ、またか」と現地人と同様な反応を示し、問題意識が薄れ、問題を問題と思わなくなってしまう。しかし、2年間であると、1年目の強烈な印象をあたため、それを2年目により詳しく観察し分析することができる。印象がまだ鮮やかなうちに帰国することができる。一般の日本人がアルゼンチンに行くとするれば、それは海外旅行などのためであり、そういう大部分の人々に役立つのは一年目の強烈な印象の分析と整理である。

本論文のもとになった資料は、権威ある学者の意見、信頼できる新聞記事、私自身の観察・取材・インタビュー、私の社会人大学院クラスでの意見交換²⁾、などである。信頼できる政府の公表データもできるだけ利用した。引用文と訳文は四角いボックスに入れて私論と区分することにする。現地の専門家が現地の問題を語る時、その批評は、事実そのものを反映してはいるが、外国や周囲の国々と比べると厳しすぎる、ように思えることがある。ちょうど日本の専門家が日本の問題を批評する時と同じである。この点にも注意する。言い換えると、これから扱うアルゼンチン自身の諸問題の多くは、周りの南米の周辺国に比べれば、たいしたことではない、と南米全般の専門家は述べることであろう。これは私の実感でもある。

2) ラプラタ大学国際関係論大学院における私のクラス「日本政治経済論……アルゼンチンとの比較」の大学院生は昼間働く大学院生である。彼らの仕事は弁護士が多く、一人は州議会議員である。彼らとの意見交換は大変有用であり、私が教えられることが多い。まさに教えることは教えられることである。JICAシニア海外ボランティアとしてアルゼンチンで活動中得たアルゼンチン情報が本論文の基礎になっているが、すべては私個人の意見であり、JICA事務所の見解を示すものではない。

日本国際経済学会第67回全国大会（2008年10月12日、兵庫県立大学）において私は本論文の重要な部分を報告した。座長の西島章次教授（神戸大学）やフロアの貴重なコメントに謝意を表したい。それらに基いて改良したのが本稿である。

1 経済成長と公民意識

どの社会でも人々の間にある種の道徳があるはずである、と平和な日本に住んでいると感じる。果たして南米の中進国アルゼンチンではどうであろうか。アルゼンチンの哲学者 Enrique Valiente Noailles（エンリケ・バリエンテ・ノアイジェ）は En el país crece la economía, pero falta conciencia cívica（この国では経済は成長するが、公民意識は不足する）という小論³⁾の中で、Correlación Inversa entre Crecimiento Económico y Pobreza Cívica（経済成長と公民意識の逆相関）を次のように指摘している。以下の囲みの中は引用文とその意識を示す。なお最後の質問に番号がついているが、これは読者のために訳者が付加したものである。

Crecimiento económico, pobreza cívica

En los momentos en que hay fuerte crecimiento económico, la preocupación de la ciudadanía por los bienes de otro orden, en particular los bienes sociales intangibles, como la libertad, la calidad de la política o de la democracia, tiende a declinar o a extinguirse. Pero también se verifica con fuerza lo inverso: cuando el país entra en una crisis económica profunda, la preocupación por

3) Enrique Valiente Noailles, “En el país crece la economía, pero falta conciencia cívica”, La Nacion, Lunes 16 de octubre de 2006. página 1.

lo cívico súbitamente salta a un primer plano porque se intuye que está allí el corazón del problema.

En la era Menem, el violento despertar de la economía funcionó como un potente hipnótico en la percepción social de la realidad. Con la Alianza, en cambio, la contracción fenomenal de la economía despertó al máximo la conciencia ciudadana de necesidad de transformación social.

Con Kirchner parece haber comenzado de nuevo el sueño. El crecimiento a tasas chinas despide un aroma embriagador que hace que sus índices de popularidad se mantengan muy altos a pesar de la creciente pobreza cívica que está viviendo nuestra democracia.

La crisis se percibe como una herramienta privilegiada de cambio, casi la única que hemos inventado para torcer nuestro destino.

- (1) ¿Podríamos trazar la hipótesis de que el factor que tiende a unirnos es la desgracia y que el factor que tiende a separarnos es la bonanza ?
- (2) ¿Podríamos decir que nos unimos para sobrevivir, pero que nos separamos para vivir ?
- (3) ¿Podríamos decir que lo que sella nuestra unión es el vacío y que lo que fomenta la desunión es una relativa plenitud ?
- (4) ¿Por qué la disminución de la calidad democrática es funcional a la mayoría ?

高い経済成長と乏しい公民意識

好景気（高度経済成長）になると、市民の公共性への関心は薄れるまたは消える傾向にある。不景気（低成長）や経済危機になると急に人々の公共性への関心が強まる。問題の核心が公共性の欠如に

あるからである。公共性 (lo cívico) とは目に見えない社会的公益財 (los bienes sociales intangibles) であり、言論の自由、政治の質、民主主義の質を指す⁴⁾。経済成長と公民意識との間には強い逆相関の関係がある。

メネム政権の時代は経済が急に好転し、社会の厳しい現実に対する懸念は強い睡眠薬を飲まされたかのように、薄れた。それに対して、後のアリアンサ⁵⁾のもとで経済が著しく悪くなると、社会改革の必要性に対する市民の関心は最大限に高まった。

キルチネル政権のもとで睡眠（無関心）が改めて始まった。中国経済のように高いアルゼンチン経済の成長率は、睡眠作用を伴い、公民意識の欠乏がアルゼンチン風の民主主義に付きまどっているにもかかわらず、キルチネル政権は高い支持率を保っている。

危機は特別な改革の道具として認識されている。われわれの進む方向を変革するために創り出された唯一の道具である。

- (1) 次のような仮説を立てることができるだろうか。我々を結合するのは不幸（不景気）であり、我々を分裂させるのは幸運（好景気）である、という仮説である。
- (2) 我々は生き延びるために団結するが、生きるために分裂する、と言えるであろうか。
- (3) 我々の結合の中身は空白であり、我々の分裂を助長するのは相対的な裕福さである、と言えるであろうか。
- (4) 民主主義の質の低下が多くの人々にとって有用であるのはなぜか。

4) 訳注：さらに良い教育、制度の透明性、腐敗の欠如なども含む。

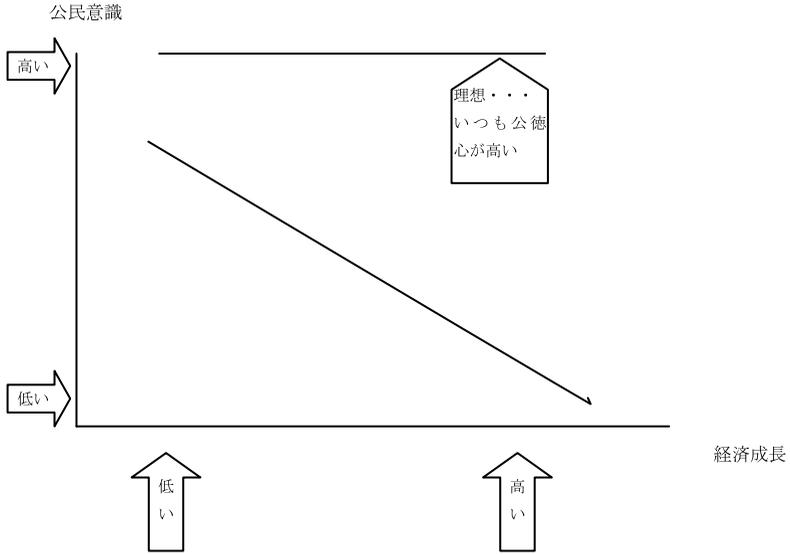
5) Alianza significa la unión de partidos políticos durante la época del Presidente De la Ruá. アリアンサとは連携(デラルア大統領時代の政党間の連携)を指す。

最初の三つの質問(1), (2), (3)にはいずれも肯定の返事をする事ができる。不景気のもとで失業者は団結し要求をつきつけるが、景気が好転すればまた人々は離れ離れになりそれぞれの裕福さで満足する。団結するのは危機を乗り越えようとする時であり、職にありつけ暮らしをエンジョイできるようになると皆はまたバラバラになる。苦しいときに団結するが、その中身はからっぽであり、団結に持続性はない。危機が去って就職し落ち着くと団結は終わる。最後の4番目の質問(4)には、低水準の民主主義から益を受けそれで満足する人々が多いからである、と答えることができるであろう。

社会制度の改革を求めて多くの人々が抗議するのは不景気で不満が増える時である。2001年の複合的危機の時もそうであった。国民の多くは政府が悪いという意見で一致し一緒に抗議行動に走った。景気が悪くなり失業が増し、インフレがひどくなると、政治の倫理の低さ(腐敗)がとたんに人々の関心事になる。そうやって危機を生き延びるために団結するが、一時的である。政治は大衆迎合的であり、政府は金をばらまき口約束をして民衆の不満を抑えるのが常である。一旦景気がよくなって収入があると、公共性への関心は薄れ、人々は各個人に分かれる。個人主義のアルゼンチンでは意見の不一致や総意の欠如がいつもの普通の状態である。経済成長と公民意識の逆相関(不一致)がアルゼンチン社会の持続的な発展を拒んでいる。景気のいかんにかかわらず経済成長と公民意識がいつも共存することは理想であるが、それは絵に描いた餅にすぎない。

経済危機があってもなくても公民意識が存続するためには前向きな努力の統一と継続が必要である。言い換えると、一貫した長期的努力が求められるが、これはアルゼンチン人の一般的な気質に反する。長期的方針の無いところに有意義な短期的計画の成功があるはずがない。アルゼンチンはミュルダール(Myrdal)の言う「軟性国家」(Soft State)⁶⁾の

第1図 経済成長と公民意識の関係



典型例である。危機を乗り越えるためにはどうしても長期的視点を確立する必要がある。

経済成長を横軸に公民意識を縦軸にとって図解すると第1図のようになる。

団結の実体と家族愛

不景気で高まった公民意識における団結は、本当の意味において、国論の統一を意味するのであろうか。エンリケ・バリエンテ・ノアイジェ（著者）も示唆しているが、答えは明らかにノーである。不景気のもと

6) 「軟性国家」(Soft State) とは、「基本的な改革を制度化し社会的規律を強いる能力も意思も持たない国家」である。詳しくは、阿部清司「アフリカ経済の悲観……Afro-Pessimism……」『千葉大学経済研究』第16号第4号、2002年3月。pp. 894-895を参照されたい。

での一団結は本当の意味の持続する大衆の一致ではない。それはその場しのぎにすぎない。

人々の意見が完全に本質的に一致したなら、それは景気が良くなっても、持続するはずである。アルゼンチンの社会に求められるのはそういう意味の国論統一である。それは、単なる理想にすぎないが、第1図では、上のほうの平行なラインで示されている。右下がりの線で示される公民意識を平均すると、かなり低いレベルにある、ことも図に含まれている。

なぜ真の意味での国論の統一がアルゼンチンでは困難であるのか。それは、幾度も議論されてきたことであるが、短期的なその場しのぎの思考に傾きやすい国民性のためである。一時的な短期思考は、有権者一般にも、政治家にも、あてはまる。

一般に、くったくのないラテンアメリカ人は陽気で楽天的であり、協力や約束や規律による持続的な拘束を苦手とし、長期計画になると途端に興味を失う。アルゼンチン人もその典型である。

その場しのぎの思考しかできないのは長期的な見通しが立たないことをさす。先進国では社会が安定し、長期的な予想が立ち、経済成長と公民意識（公衆道徳）との共存は比較的容易であるが、そういうことは発展の停滞した不安定なアルゼンチンでは困難である。両者の不一致が内部分裂したこの国の問題の深刻さを象徴している。階級や団体や組織の利害対立がひどい。アルゼンチン共和国の独立は1816年7月9日であるが、それ以来194年が経った2010年でも国論の統一は残念ながら欠けている。連邦派（連邦主義者、Federaaalistes）と統一派（中央集権主義者、Unitarists）が互いに矛盾する政策をそれぞれ勝手に求め続けてきた⁷⁾。

7) そういう分裂は他の途上国でもある。インドネシアのReformasi（ばらばらな改革）については例えば次を参照されたい。阿部清司「インドネシア経済の発展と停滞」『千葉大学経済研究』第14号第3号，1999年12月，pp. 551-553。

アルゼンチンの内部分裂は今も続く。

ブエノスアイレスの五月広場にある印象的なバラ色の建物は、大統領府（カーサ・ロサーダ、ピンクハウス、Casa Rosada, Pink House）である。Plaza de Mayo（五月広場）にある大統領府はなぜピンクなのだろうか。19世紀半ばにサルミエント大統領（在位1868-74）は連邦派と統一派との和平を達成しようと努力した。連邦派の旗は赤色、統一派の旗は白色である。二つの派（旗）を調和させようという試みは色で示せば中間のピンクに落ち着く。ピンクは和平の象徴であるが、サルミエントの願いはいまだに実現していない。



Amiguismo 国や社会の統一が不可能でも、家族や親戚や友人の小集団における一致は健在である。アルゼンチン人の家族愛や友人愛を Amiguismo（アミギスモ、アミゴ主義、友人主義）と言う。これは社会的に見て(1)マイナス面と(2)プラス面を持つ。

(1) マイナス面

他の人々の疎外である。Amiguismo (アミギスモ, アミゴ主義, 友人主義) とは、仲間だけで固まる傾向を指す。法を超えても家族や親族や友人を大切にする傾向であり、自愛主義や個人主義の延長にある。自分の周りの小集団 (家族, 友達, 政党) だけがいつも結集する。無条件に意見の一致があるのは自分とその仲間たちという小集団である。縁故関係の重視は手続きや取引の不正や汚職につながりやすく、これらは商売コストの上昇を招く。不利益を被る外部のビジネスマンは関与を控え、経済に悪影響を与える。仲間意識で固まるので、他人は疎外される。外部のビジネスマンが縁故で固まったビジネス・サークルに入ることは不可能に近い。政界におけるアミギスモの弊害は大きく、政権が変わる度に、アミゴ職員やアミゴ顧問が続出し、賄賂や腐敗が横行する。なお Amiguismo は徹底した「自愛精神」(primero yo, 第一に私) の延長上にある。

(2) プラス面

家族愛を大切にする傾向は古くからの伝統の名残であり、互いの愛のネットワークは微笑ましくまた褒めるべきことである。愛する家族や仲間は愛情をいつも互いに豊かに表現する。日本にない微笑ましい光景を街中で見かけることもある。愛する父親は中年の娘の頬に「愛しているよ」とキスする。20代の息子が「愛しているよ」と母を抱擁することも珍しくない。これらはアルゼンチンでは不思議ではない。表情に乏しい日本では到底考えられないことである。社会の制度の基本は家族制度である。外国人でも本当の友人になれば家族の一員として受け入れられるが、異国人にとってこれほどうれしいことはない。健全な家族が沢山あるならば、その社会には希望がある。

仕事においては(1)と(2)の二つの面を使い分けることが大切になる。Amiguismo (アミゴ主義, 友人主義) をうまく活用できれば日本企業

もアルゼンチンに来て儲けることができる。まずアルゼンチン社会に溶け込むことである。アルゼンチン人と一緒にマテ茶を飲み、アサードを料理して楽しみ、ゲームやスポーツを一緒に行い、地元の諺や洒落やユーモアを解するよう努める。そういう根回しや準備は後に報われる。言葉は大切であるが、それは手段にすぎない。異文化に開かれた心が絶対が必要である。そうやって親友ができ、家族ぐるみの付き合いが定着すれば、しめたものである。ビジネスの下地がそこまで行くには努力や心労や試行錯誤があるが、避けて通れないことである。そうやって Amiguismo (アミゴ主義, 友人主義) のプラス面が定着すれば、仲間に入れてもらえる。そうして慎重にマイナス面を克服できるようになれば仕事において希望がわき前途が開けてくる。人脈が大切であるのは古今東西不変である。

一般にアルゼンチン人は二面性を持つ。一つは愛国主義者という面であり、他の一つは自己批判という面である。家族や友人と無関係な社会や国家は信用できないとされる。

不慣れな日本人は、アルゼンチンとの仕事やビジネス交渉において、自己主張と責任転嫁や約束不履行に振り回され、イライラすることがある。大切なことは、期待通りにことが運ばなくても、あせらないことである。日本とは違う人生観や価値観や道徳感覚で社会が動いていることをよく理解し、ある程度それに従う心構えが求められる。

短期的な視点とポピュリズム

長期的な見通しのないところで立てられる短期的な計画とはどのようなものであろうか。土台がしっかりしていない所に建てられる家はどのようなものであろうか。それはその場しのぎの不安定なものでしかない。アルゼンチンでは本当の意味の持続的な長期的政策が残念ながら欠けている。すべては短期的な策であり、政策に連続性はない。政策の実行を妨

げる要素があまりにも多いからである。大多数の政治家は長期的な政策実行を視野に入れてはいない。周囲の人々との関係から自分の任期中のことしか眼中にないのである。

エコノミストのDaniel Montamat⁸⁾ (ダニエル・モンタマト) は次のように言い切る。

Estamos entrampados en el corto plazo. Es producto de las medidas populistas tomadas por el Gobierno. Hay que tomar el toro por las astas para superar una crisis.

我々は短期的思考のわなにはまっている。それは政府のポピュリズムの手段の結果である。危機を乗り越えるには問題に正面から取り組む必要がある。

大衆の好みに迎合する人気取り政治をポピュリズム (populismo) というが、それは大衆迎合的政治であり、その場しのぎの一時的対策の繰り返しにすぎない。その背後にはペロニズム (後述) の強い影響が存在する。

経営学者のFernando Fragneiro⁹⁾ (フェルナンド・フラグネイロ) も次のように述べる。

Los argentinos somos rehenes del corto plazo, lo que implica que no se puedan ver “los problemas de fondo”. La rápida recuperación de la crisis de 2001 es un arma de doble filo, porque nos

8) Daniel Montamat, “Estamos entrampados en el corto plazo”, La Nación, Sábado 21 de julio de 2007, p. 18.

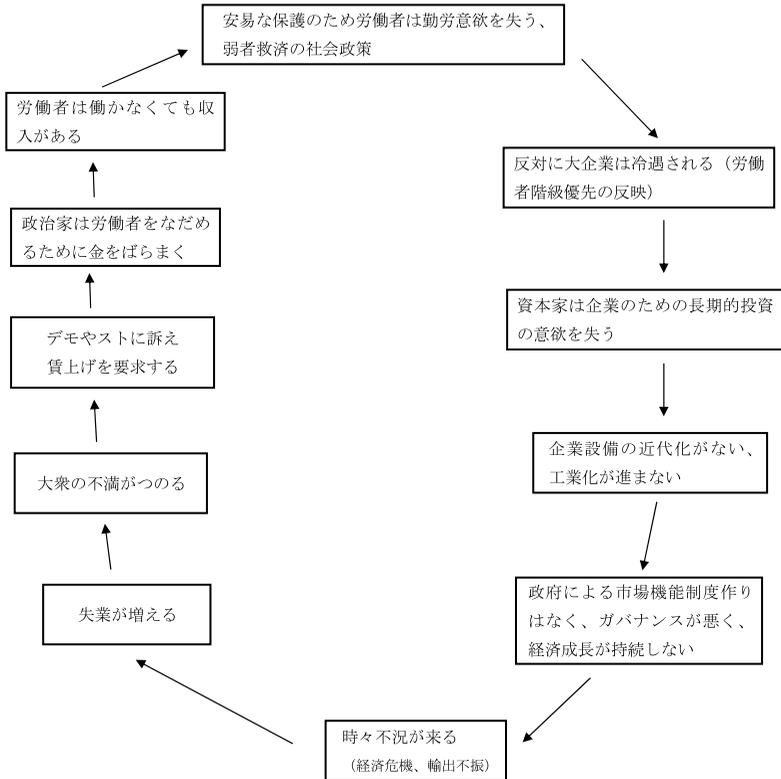
9) Fernando Fregueiro, “Estamos narcotizados con el crecimiento”, La Nación, Domingo 19 de Agosto de 2007

narcotiza, nos confunde y nos hace creer que el país se ha encaminado.

アルゼンチン人は短期的な見方にとらわれている。ということは奥深いところにある問題を見ることができないということだ。2001年危機からの急速な回復は両刀の刃である（プラスの面とマイナスの面を持つ）。見かけ上の回復（経済成長）は我々を麻痺させ、迷わせ、国が順調に進んでいると思わせている。

第2図 ポピュリズムの悪循環

(populismoポプリスモ, ポピュリズム=大衆迎合的政治)



ポピュリズム (populismo) をめぐっては第2図のような悪循環が認められ、アルゼンチンの低迷、停滞、衰退に結びつく。

2 汚職の容認と悪循環

ラテンアメリカでは汚職が広く深く浸透している。例えば、パラグアイに関してクラリン紙¹⁰⁾は「人々は汚職にうんざりしている」と書いている。パラグアイの腐敗指数はアルゼンチンよりもひどい (Transparency International, 2007)。

アルゼンチンでも汚職は全国的になされている¹¹⁾。人々の間に汚職や腐敗を容認する傾向が定着している。政治学者のNatalio R. Botana (ナタリオ・R・ボタナ)¹²⁾は

La corrupción no afecta al respaldo electoral del gobierno, siempre y cuando éste ofrece un buen rendimiento económico con disminución del desempleo. Como el elector sufre más con el estómago y los instintos que con sus sentimientos morales, la calidad ética de la política no resulta un asunto relevante.

汚職が政府の支持層に影響を与えることはない。失業の減少を含む経済的利益を伴うなら常にそうである。道徳感覚よりも胃袋や本能に従って投票するのが有権者であり、政治の倫理性は重要なことではない。

10) Clarin, Sabado, 19 de Abril de 2008. p. 47 La gente esta harta de ser humillada pro los corruptos. Esta cansade de la corruption, del hambre de la pobreza.

11) 阿部清司「アルゼンチン経済の破綻と活性化……大来レポートの再評価」『世界経済評論』Vol. 51, No. 6. 2007年6月号

12) Natalio R. Botana. "El juego de la corrupción", La Nacion, Jueves 16 de agosto de 2007, página 25

と述べる。

政治の透明性は期待できず、国民の政治不信は根が深い。これまで幾度も政治家に騙されてきたからである。政府と民間の協力が非常に困難である構造になっており、経済政策において長期ビジョンが確立されるという確率は残念ながらゼロである。日本的な産業政策などはまったくの論外である。政治家の低いモラルから得をする人々がそれを支持する。低レベルの公衆道徳で満足する人々である。国の透明性や長期ビジョンや安定性を根本から否定するのが腐敗である。

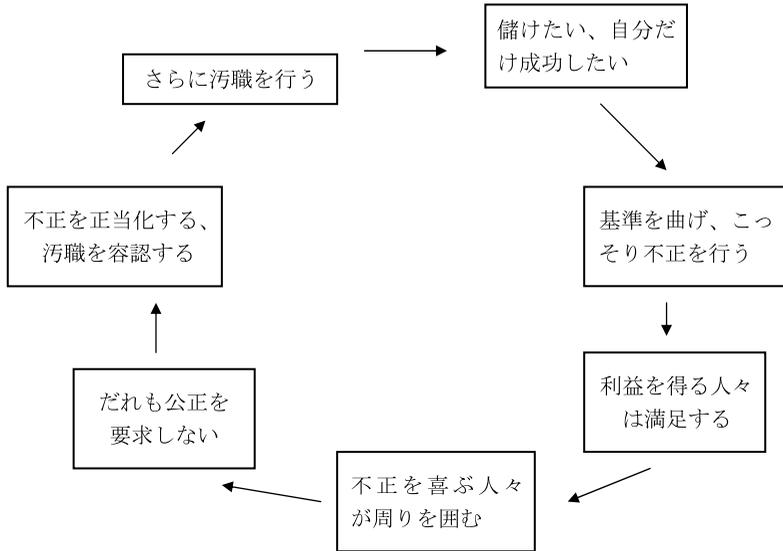
民間の企業も同じく一般的に汚職に染まっている。外部の経営コンサルタントが先ず訊かれるのは、「どうしたらうまく脱税できるか」、という点である。儲かっている企業ほど脱税に長けているといわれる。利益は、経営効率の向上よりも、賄賂（袖の下の金）から生まれると考えられている。社員が業者から賄賂を受け取ることは日常化しており、コストの削減や経営の透明化などは考えられない。政商ビジネスが幅を利かす。ミュルダール（Myrdal）の言うfolklore of corruption（汚職の習俗）¹³⁾がここでもまだ見られる。

アルゼンチンの問題は経済学よりも社会学や政治学の問題である。経済制度よりも政治制度のほうが重要であり、富は市場よりも介入や統制によって生じるとされ、多くの政商がいる。政治に無関心でも経済的に豊かな日本と違って、アルゼンチンでは政治が市民生活の幸福に直接的な影響を与えている¹⁴⁾。賃上げ率は、今時珍しいが、アルゼンチンでは政府の一声（亜国の鶴の一声）に左右される。労働市場の需給によって

13) 役人への賄賂を当然視し釈迦の義務とみなす慣行を指す。詳しくは 阿部清司「アフリカ経済の悲観……Afro-Pessimism……」『千葉大学経済研究』第16号第4号、2002年3月。pp. 894-895を参照されたい。

14) 井垣昌「失業・インフレ・家計逼迫……暮らしから見える経済危機」『月刊オルタナティブ』2001年11月号、p. 11

第3図 汚職の悪循環



決まるのではない。

生き延びるためにはどんなことをしてでも成功しなければならない、どうしても儲けを出したい、という思いがつのり、道德基準を曲げ不正を行う。さらに儲けを出すためにさらに不正を行う。悪循環が存在する。汚職がさらに汚職を生む環境が確かにある。簡単に図解すると第3図のようになろう。

経営学者のフェルナンド・フラゲイロ (Fernando Fregueiro) は¹⁵⁾次のように述べる。

Una practica profesional y honesta de los negocios pasa más por

15) Fernando Fregueiro, "Estamos narcotizados con el crecimiento", La Nacion, Domingo 19 de Agosto de 2007

el día a día que por situaciones extremas. Hoy, al empresario que dice: “No tengo otra alternativa que poner en marcha prácticas corruptas”, yo le contestaría: “Ponga se a pensar en otra actividad.” Hay que salir de esa trampa, que es pensar que estamos inmersos en un círculo vicioso del que no podemos escapar.

正直で専門的なビジネス習慣は、極端な状況のことではなく、毎日の日常のことである。不正な慣行に手を出す以外に方法はないと言う経営者に、「別の行動を考えなさい」と私は答える。抜け出すことが不可能な悪循環に陥っているが、そういう思考のわなから抜け出す必要がある。

フェルナンド・フラゲイロ (Fernando Fregueiro) はブエノスアイレスにある欧米系の著名なビジネススクール (La Escuela de Negocios de la Universidad Austral) の学長であるが、その彼は汚職の悪循環が広く存在するという現実を認めている。それを直視しながらどうしたらそこから抜け出ることができるか、と真剣に考えている。

彼は勇敢にも続けて次のように述べる。

Necesitamos que la justicia argentina sea cada vez más independiente y tener la certeza de que quines estén tentados de prácticas corruptas recibirán todo el peso de la ley.

アルゼンチンの司法はますます独立していなければならない。汚職に手を染めるものは誰でも全ての法律の処罰を必ず受けるようにしなければならない。

法律の明記する罰をそのまま当てはめることをしなければ不正の撲滅にはつながらないという警告である。特権階級はたとえ罪を犯しても刑

罰を陰で免れる（または軽減される）傾向がアルゼンチンでは持続している。例えば、Dos por uno（ドス・プロ・ウノ）という法律がある。2を1にする、つまり、刑期を二分の一にする、という取り決めであり、これがしばしば特権階級に有利に適用されてきた。厳しく罰せられることがないので人々は不正を行い、公德心は低いままにとどまっている。刑罰の軽減のために賄賂が飛び交うのは当然である。賄賂の額がモノを言う世界である。

2001年の経済危機後の見通しに関してグラミン財団のNoberto Kleiman（ノルベル・クレイマン）（Fundación Grameen Argentina¹⁶⁾）は

Cuando la corrupción llega a la justicia, esto invade todos los niveles de actividad y todos niveles en que se desarrolla un ser humano en sociedad.

腐敗が司法に及ぶと、全ての活動のレベルが悪影響を受け、社会の中の人間の行動の全ての段階が悪影響を受ける。

と言い切る。ジェトロのブエノスアイレス所長稲葉氏¹⁷⁾も「法的安定性の欠如が経済活動の広範な分野に渡っている」ことを自らの3年9ヶ月の駐在経験から指摘している。社会の安定性の根幹は司法の独立と安定性であるが、これが崩れれば社会の全ての部分に不正や汚職や法無視がはびこることは明らかである。アルゼンチンは法律よりも人間関係がものを言う社会である。富は経済取引からではなく政治取引から生じる、ことをアルゼンチンの上層部はわきまえている。権力を持つ人との関係

16) グラミン財団のNoberto Kleiman（ノルベル・クレイマン）とのインタビューはCrisis Argentina 2001（JICA DVD）に収録されている。

17) 稲葉公彦「法的安定性の欠如をもとめないアルゼンチン」経済随筆，在亜日本商工会議所会報第39号（2007年1月号），p. 92。

(コネ) がすべてを牛耳る。外国人をクライアントとしている大手の法律事務所は必ずビザ・セクション (Visa Section) を設けているが、ここで働くのは移民局のOBであり、弁護士ではない。外国人のビザ取得では常にトラブルが起きており、その解決が移民局OBに委ねられている。これは行政機能がうまく機能していないことを示し、当局との人的つながり (コネ) が無ければビザ取得が困難である、という惨状を示す。

アルゼンチンは法治国家として機能してはいない。司法の中立性や独立性は確立されていない。裁判官の任命が為政者によってなされ、国民がそれに関与することは全くない。国の公正さの基準は公正な裁判から来るが、これが壊れている。裁判官の質や公平さを期待することは不可能である。裁判沙汰はしばしば金次第となる。同様なことは司法の番人であるべき警察にも言える。強盗事件が引退した元警察官によって引き起こされることもまれではない。裁判官や警察官を含む事件で政治家が有罪判決を受けた例は皆無であり、事件の解決も金次第となる。

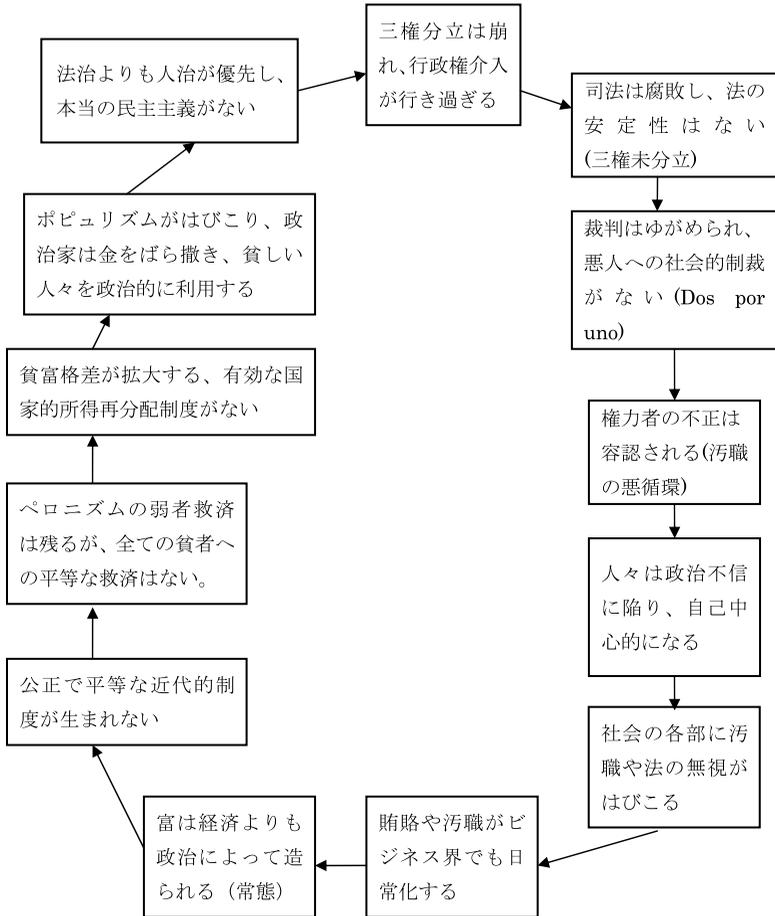
このような悪循環をまとめると第4図のようになる。

さらに上述のフェルナンド・フラゲイロ (Fernando Fregueir) は若者 (28から38歳) について次のように述べる。

Los muy jóvenes, de 28 a 38, vienen con una dosis de idealismo. Son muchos los que no quieren incorporarse a la practica de las empresas, no sólo por temas de corrupción, sino porque encuentran que la vida corporativa no les ofrece un futuro que valga la pena.

28から38歳の若者は理想論のかたまりである。会社の実務に組み込まれることを好まない。その理由は、汚職があるから、さらに会社生活が苦勞に値する将来を提供しないから、である。

第4図 司法腐敗（諸悪の根源）とその諸影響（悪循環）



若い社員は会社人間になるよりもまず個人の利益や好みを優先させる。日本的な会社への忠誠心は困難である。そういう状況では長期的な人材育成などの計画は立たない。従業員教育を重視する態度も生じない。社長も短期的な儲けで一人満足し、長期的な設備投資には無関心である。しかも、それで「すべてよし」という風潮がただよう。

確かに鋭敏な良心を持つ人もいる。そういう例外的なアルゼンチン人は腐敗の減少に向けて真剣に努力するが、やがて、それが無駄であるということに気づく。汚職を容認する社会では正しい努力が社会的に評価されることはないからである。努力しても周りがついてこない。結局、自分だけが疲れ果てて犠牲になる。正直者が馬鹿を見る典型である。極端な場合には反対者によって闇に葬られる（殺される）。裁判所における正直な証言の翌日に消された人もいる。行き過ぎた偏った個人主義が蔓延する社会は公正な同情心を欠く。良心的な人は、挙句の果てに、最善や理想をあきらめ、次善や次の次善（三善）で満足して、命を保つ（殺されない）道を選ぶ。当面の生活で多少とも満足できれば、すれば全て良しとされ、第1図に含まれているように、政治の腐敗に関心を失ってしまう。そういう汚職の容認と悪循環はガバナンスの悪さにつながる。

3 悪いガバナンス……制度的能力の未発達

中進国のアルゼンチンでは制度が制度してうまく機能していない。これはガバナンスに関係する。ガバナンスとは、政府（government）より広い概念であり、公的または私的な制度が共通の事柄を管理（＝統治）するさまざまな方法の総称を指す。**緩やかな活動調整（＝統治）の枠組み**であり、政府、企業、NGO、市民団体などがそこに参加する。JICAは、ガバナンスを、「政府機構や制度のあり方のみならず、政府（中央・地方）と企業、市民との協調関係や、その中での意思決定のあり方など、制度全体の構築やその運営方針を指す」としている¹⁸⁾。複数のアクターの間で、合意形成、権力や資源の分配、意思決定の仕方などを決めるメカニズムやルール形成・運営である。世界銀行の研究グループはガバナンスの6つの側面（1 民主制の保障、2 政治の安定、3 政府の効率、

18) Monthly JICA, July 2007, p. 4

4 政策の妥当性・有効性, 5 法による支配, 6 汚職の抑制) に注目している。

良く考えてみると, これらは冒頭に掲げたEnrique Valiente Noailles (エンリケ・バリエンテ・ノアイジェ) の言う社会的公益財 (los bienes sociales intangibles) に似ており, これらの欠如がアルゼンチンで目立つ。

2001年の経済危機を回想して, 政治学者のNicolás Ducoté (ニコラス・デコテ) (CIPPEC¹⁹⁾) は, 長期的視点から,

Si el gobierno nacional y los estados provinciales no trabajamos juntos, no vamos a salir adelante.

もし中央政府と地方政府が一緒に働かないならば, 前に進むことはないであろう。

と結論している。今後の危機回避策として必要なのが, 至難ではあるが, 地方と中央の政治的一致と協同である。協同ということは, 要するに, Hay que trabajara juntos (一緒に働かなければならない) ということである。この忠告が新鮮味をおびる点にアルゼンチンの抱える困難が凝縮されている。「一緒に働く, 協力する, 共同して政策を実行する」ことほどアルゼンチン人にとって不安なことはない。伝統的な国民性がそれを許さないからである。それは大きな挑戦である。しかし, 明るい将来を思うときに, そういう挑戦を避けて通ることはできない, ことをニコラス・デコテは国の内部から警告している。

良いガバナンスは自助努力や貧困削減や持続的開発にも不可欠である。ガバナンスが悪いことは社会的な協同の欠如を指す。マクロレベルのガ

19) CIPPEC significa Centro de Implementación de Políticas para la Equidad y el Crecimiento (平等と成長のための政策施行センター)。ニコラス・デコテとのインタビューはCrisis Argentina 2001 (JICA DVD) に収録されている。

バナンスの悪さはミクロレベルのガバナンスの悪さと密接につながっている。アルゼンチン社会の根底には「自分さえよければよい」という考えがあり、他人や他社への配慮（利他的精神）が欠けている。協力して一つの仕組みを作ろうという公德心は存在しない。アルゼンチンには国としての一体感が未だに乏しい。豊かな資源があってもそれを国全体のために平等に活用しようとする仕組みがない。

一部の特権階級だけが恩恵に預かり、他の大部分は疎外されている。特権階級は自分の富をヨーロッパの銀行に預けるが、そういう伝統が建国以来200年近く続いている。疎外された層は文字通り遮断され、特権階級との接触を全く欠く。自分または自分の周りの小集団（家族、友達、政党）だけを信頼するということはその他の人々を除去する、ことを意味する。そういう疎外が当たり前のこととして定着していることは恐ろしいことである。アルゼンチンで盛んなサッカーもある意味では統一を妨げているといえるかもしれない。特定のチームの応援で熱狂的になることは他のチームの敵視につながるし、一体感の欠如につながる。人気のあるチームの試合になると、皆がレストランの大型テレビの前に釘付けになるが、そういう集まりは一時的である。

市場メカニズムが働かないのはガバナンスが悪く必要な制度が整っていないからである。制度的能力は世界銀行が重視する能力である²⁰⁾。制度的能力は、司法制度の透明化、国会の透明化、民主主義の進展、行政能率の向上、汚職の撲滅、治安の改善、無法地帯の縮小、公務員の縁故採用の禁止、労働市場への市場原理の導入、中央政府と地方政府の関係改善、貿易や金融の近代化、などを含む。

世界的に見て明らかなことは、「市場指向でプラグマティックな政策が、

20) 山崎圭一、「アルゼンチン危機とブラジル、ペルー」、インターネット公開論文 (<http://www.bizpoint.com.br/jp/reports/yamaz/0203.htm>)

高度な介入主義政策よりも、より良好な結果をもたらしている²¹⁾」、という傾向である。これはソ連の共産主義の崩壊でも中国経済の成功でも明らかであるが、このことの意味がアルゼンチンでは不足している。むしろそういう一般的な傾向を無視する行動すら見える。公務員が競争的な公平な試験によって採用され、公僕としての使命感をもった規律正しく忠実に働くことは、取引コスト (transaction costs) の削減に役に立つが、こういうこともアルゼンチンでは無理である。市場メカニズムが働くよう制度が事前に改善されていれば、IMFの構造改革路線が押し付けられても、すぐに社会不安につながることはない。このことは特にアルゼンチンにあてはまる。共産主義崩壊の原因は多くの本で分析されている²²⁾。統制経済の悪循環は第5図のように図解することができる。よく見ると第3図の汚職の悪循環と重なる部分がある。これは当然のことであり、統制経済はどこでも多くの不透明性を抱える。

アルゼンチンは制度的能力の向上で著しく後れている。賄賂を渡す必要が無数に存在し、手続きに時間がかかる。役所の前に長蛇の列ができても、担当の役人と縁故関係にあるなら、早めに手続きしてもらえる。透明性の欠如が多くの組織の能率を落としている。これらは全て取引コスト (transaction costs) を増やし、ビジネスの悪材料となる。

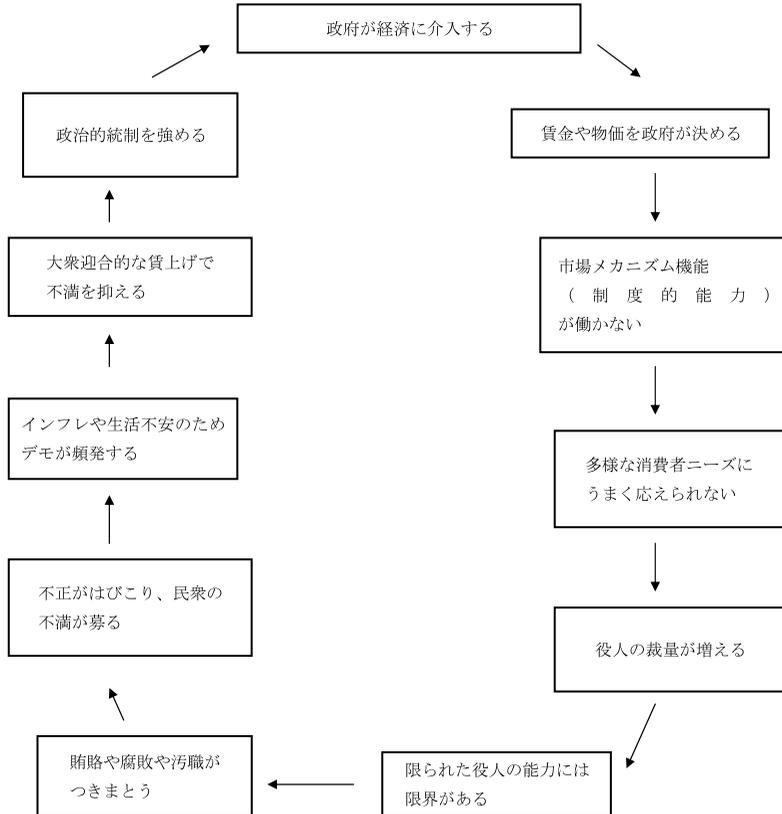
公的部門が腐敗し政治家のモラルが低い社会において、民営化が実行されればどうなるであろうか。利権が国家から特定の関連企業に移るだけで、経済全体の活性化にはつながらない。政権と結びついた一部の企業が利権を受けて得するだけである。そういうマイナスの例にアルゼンチンは事欠かない。

21) 原田泰・黒田岳士「なぜアルゼンチンは停滞し、チリは再生したか」内閣府 経済社会総合研究所 (ESRI Discussion Paper No. 46) June 2003, p. 5。

22) 例えば、杉本昭七・関下稔・藤原貞雄・松村文武『現代世界経済をとらえる』東洋経済新報社、1996年、第15章を参照されたい。

第5図 統制経済の悪循環

〈市場経済主義のチリと違ってアルゼンチンは経済介入主義を貫く、統制や介入は多くの矛盾を含み悪循環に陥る。一般的にプラグマティックな市場指向的政策は、高度な介入主義的政策より、より良い成果をもたらすが、このことはアルゼンチンには当てはまらない。〉



アルゼンチンは組織体として機能していない組織が多い。組織の成員一人一人は、個人的利益にもとづいて行動し、組織の利益は二の次である。一人一人が有機的に組み込まれコミュニケーションが横にも上下にも良好である組織は、残念ながら、アルゼンチンには存在しない。

横の連絡が悪い

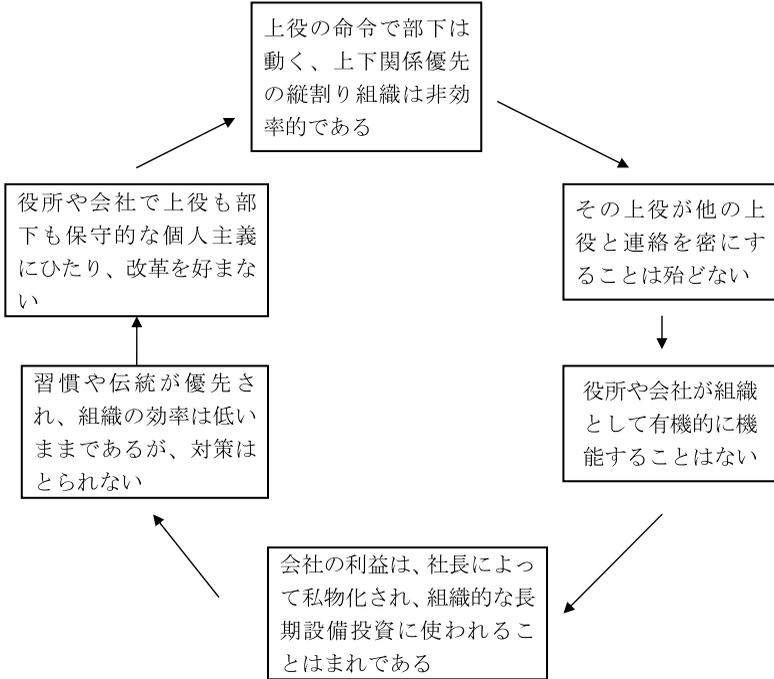
こんな経験を私は持った。

ある日突然インターネットが使えなくなった。プロバイダーの会社に電話しテクニカルサポートの人に説明した。テクニカルサポートの人たちの言うことが人によってまた日によって違うことに驚いた。第一の人は「今日中に回復する」と言い、第二の人は「1時間後に電話する」と言い、第三の人は「明日11時まで直っている」と言った。しかし、すべて見事に期待は裏切られた。翌日電話すると別の人が出てきて別の情報を聞く。「前日の人の名前を出してその人と話したい」と述べると、電話中とかで断られる。「一分後に回答する」と言われたのでじっと待っていると、20分も30分も音楽が延々と耳に聞こえるだけである。そのうちに忘れられ自動的に切断された。そういう無責任な言動に連日振り回された。最終的には近くのそのプロバイダーの代理店に直に行き、直接交渉してやっと真の原因を突き止めることができ、問題の解決につながった。この経験から、大切な顧客情報が共有されることはない、大会社の内部の協力体制が整っていない、横の連絡が悪い、担当者が自分の責任を最後まで果たすことはない、責任は他人になすりつける、社員が会社のためではなく自分のために生きている、などを学んだ。縦割りの日本でも横の連絡は必ずしもよくないが、アルゼンチンではそれが甚だしい。こういう経験は他でもよく聞かし、「見え透いた嘘」を業者がついていることに気づく日本人生活者は他にも多い。

外から見てみると役所や会社の組織運営の非効率性が目に付く。そういう問題点の連鎖を簡単に図示すると第6図のようになる。

こういう非効率な組織に汚職や腐敗が定着することは明白である。

第6図 非効率な組織運営の悪循環



従って第3図汚職の悪循環とつながっている。

4 Viveza Criolla (ビベサ・クリオージャ、民族的ずる賢さ)の悪循環

ビベサ・クリオージャとは、アルゼンチン独特の抜け目無さ又はずる賢さを指す。その起源は、歴史的にはヨーロッパからの移民時代にさかのぼる²³⁾。移民たちはスペインやイタリアでは下層の民であったが、ア

23) アルベルト松本『アルゼンチンを知るための54章』, 明石書店, 2005年9月(その第16章はビベサ・クリオージャを詳しく鋭く明快に扱っている)

ルゼンチンのブエノスアイレスに移ってからは幸運にめぐまれて金持ちになった。成り上がり者は、よくあるように、成り金根性から地方や他の人々を見下す態度を取るようになる。その当人からすると、昔は自分も侮辱されてきたから、当然である、ということになる。自尊心を欠き劣等感をいだく欧州下層民の反発である。**ビベサ・クリオージャ**はかつての下層の民にとってはご褒美ともいえる表現である。これは、時には良い賢さを意味するが、基本的には相手を侮辱し怒らせる行動である。**ビベサ・クリオージャ**は日本のスペイン語辞典にはでていない。一般にアルゼンチン人は国や社会といった非人間的な組織を信用しない。国家に代表される抽象的なもの（非人間的なもの）は信用できない。下からはいあがってきた民にとって信頼できるは周りの家族や友人だけである。Amigoという具体的な対象への忠誠を強く持つのがアルゼンチンである。

ビベサ・クリオージャはアルゼンチンで長く暮らしていると、外国人でも遭遇することがある。侵入してきた泥棒を傷つけたら、傷つけた家の人逆にならされる国である。盗難にあっても悪いのは油断しているほうだとされることもある。アルゼンチン国債を買ったが後に債務不履行（デフォルト）に陥った場合、悪いのはアルゼンチンという国のカントリーリスクを承知で購入した投資家のほうである、とされる。アルゼンチン人は、一方では燃えたぎるような愛国主義者と形容されるが、他方では自国を批判する傾向が強い。国に裏切られてきた歴史がその背後にある。

ビベサ・クリオージャは教養のあるアルゼンチン人の間でも無意識のうちに表面化する。厄介であるが、無視することはできない。外国人でも当地に生きるためには意識しなければならない。似たような問題点はもちろん他の国々の人々にもあるが、**ビベサ・クリオージャ**というようなのははっきりした表現を示す国は他にあるだろうか。

ビベサ・クリオージャはアルゼンチンなら誰でも多かれ少なかれ身に

着けている。無意識のうちにその影響下にある。この問題に詳しいコルドバ市役所のJulio Crespo Argañarás（ホセ・クレスポ・アルガニャラス）は次のように言い切る²⁴⁾。

Viveza Criolla en Argentina es la causa principal de una crisis moral, cultural, económica, social y política. Es un grave defecto moral y cultural, con origen y predominio en Buenos Aires, afecta a la sociedad argentina y se convirtió en factor principal de su retroceso y de crisis sucesivas, que llevaron a la desaparición de la justicia social, a la dependencia económica y a la pérdida de la soberanía política.

アルゼンチンの**ビベサ・クリオージャ**は道徳的、文化的、経済的、社会的、政治的危機の主因である。それは深刻な道徳的文化的欠点であり、ブエノスアイレスで発生しそこで支配的になった傾向である。それはアルゼンチン社会に影響し、その後退と相次ぐ危機の主因と化している。さらに、社会的正義の消失、経済的従属、政治的主権（独立）の喪失をもたらしている。

Julio Crespo Argañarás（ホセ・クレスポ・アルガニャラス）によると、**ビベサ・クリオージャ**は以下の第7図のような4つの面を持つ。

公衆道徳の欠如は上流階級の人々でも見られる。聞いた話であるが、こんな例があった。

24) Julio Crespo Argañarás, ¿Qué país quieren los La “Viveza Criolla” en Argentina es la causa principal de una crisis moral, cultural, económica, social y política argentinos ?, <http://www.tabaquisimo.freehosting.net/>, Agosto 2006

第7図 ビベサ・クリオージャの4つの側面

<p>(1) Corrupción (汚職)</p>		<p>(2) Individualismo Extremo (行き過ぎた 個人主義)</p>
<p>Viveza Crillosa (ビベサ・クリオージャ、 アルゼンチン人の民族的 ずる賢さ)</p>		
<p>(4) Hábito de culpar de nuestros problemas a algún otro (自分たちの問 題を他人のせいにする習 慣、無責任主義)</p>		<p>(3) Anomia 法の軽視 (Debilitamiento de la moralidad común、公衆道徳の衰 弱)</p>

ブエノスアイレスのある旅行会社は日本ツアーを企画した。お金持ちのアルゼンチン人の一行が東京に着き、デパートに買い物に行った。そこでツアーガイドは大変恥ずかしい目にあった。綺麗に着飾ったアルゼンチン人の一行が 堂々と デパートで 万引きしたのである。いいものを見つけ、ついハンドバックに入れてしまったらしい。見ていた店員が通報したが、恥ずかしいことに、彼らに盗みは悪いという感覚は無かった。すばらしい品物がたまたま陳列棚にあったので、自分のハンドバックに入れてしまったのである。

こまったことであるが、これは事実である。アルゼンチンでは、悪い

のは隙を見せた盗まれるほうであるという見方すらある。低い公衆道徳が当然のこととして多くの人に身についている。「正直さ」という尺度で世界の32の大都市を順位付けした調査²⁵⁾があるが、それによるとブエノスアイレス市は25番目である。最後に近い順位であり、非常に不正直な国であると欧米では見られているのである。

自分たちの問題を他人のせいにする習慣、無責任主義、についてはこんな実話もある。

ブエノスアイレスのある家である日突然テレビが見られなくなった。そこでケーブル会社に修理をお願いした。5人の人たちが来たが、一人目は何もしないで帰った。二人目が帰ったらさらにテレビの映りが悪くなった。三人目は上の階のせいであるといった。四人目は下の階のせいにした。五人目でなんとか見られる状態に回復した。

こういう話は珍しいことではない。他にも沢山ある。責任を他になすりつける習癖が身についているのである。ずる賢い者をアルゼンチンではVivo (ビィボ) という。人を出し抜いていきるかっこよい者という意味である。そうでない正直者、法律を守る者は, Bobo, Tonto, Zonzo (ボボ, トント, ソンソ (馬鹿者)) などと言われる²⁶⁾。考えてみると、どちらが正常であろうか。常識的に見ればもちろんBobo, Tonto, Zonzoといわれる者がノーマルな正しい市民である。ねじれたアルゼンチン社会で生き延びる生活の知恵を持つのがVivo (ビィボ)

25) “Argentina, país... ¿honesto?”, El Día, Revista, 19 de agosto de 2007 (アルゼンチンは正直な国であるか)

26) アルベルト松本『アルゼンチンを知るための54章』, 明石書店, 2005年9月, p. 110。

である。法律や道徳を守ることも破ることもできる者、状況によって自由自在に身をこなせる者が、かっこよいとされる。

法律を守る正常な市民はアルゼンチンには少ない。正直者が馬鹿を見ることを体験しているからである。たとえてもごく少数の例外的な存在でしかない。そういう真面目な市民を馬鹿にする傾向すら見える。もっともこういう傾向は日本にも多かれ少なかれある。「赤信号、皆で渡ればこわくない」という言葉は日本人の習性をよく表している。

出世するのはずる賢い人である。賄賂をばらまきつつ陰の抜け道をたくみに登れる人が成功する。人を出し抜く能力が出世を導く。そういうアルゼンチン人であるから、ヨーロッパでの評判は必ずしも良くない。多くのアルゼンチン人は悪く見られているが、それを当人は気にすることはない。いわんやそれを反省して自ら性格を改善しようということは無。それでこそ**ビベサ・クリオー**ジャである。

真実の欠如が生活において意味することを哲学者のJosé Luis Galimidi (ホセ・ルイス・ガリミディ²⁷⁾) は質疑応答の場面で次のように言い切る

¿ Qué consecuencias acarrea la falta de verdad en la vida diaria ?

Deteriora nuestra existencia. Su falta toma diferentes formas: ignorancia, opinión liviana, engaño, irresponsabilidad y dogmatismo. Lo peligroso, en cualquier caso, es que sin verdad uno desconfía, básicamente, de sí mismo y de todo lo circundante.

日々の生活で真実が無いことでどんなことが起きますか。

我々の生存が悪化する。真実の欠如は異なる形を取り、無知、軽率な意見、欺き、無責任、独断などの形を取る。どんな場合でも危

27) José Luis Galimidi, “Vivimos divididos, sin confianza en el otro y digregados”
El filósofo José Luis Galimidi analiza el daño civil que causa el individualismo
“, La Nación, Sábado 4 de agosto de 2007

危険なことは、真実がなければ人は自分自身と他の人々への信用を基本的に失うということである。

政府の公表数字には信憑性がないと言われる。アルゼンチンでは人々の間で正直さが尊重されることはまれである。当地の諺や格言には**ビベサ・クリオージャ**に関係するものがかなりある。そのうちで三つを紹介する。

La confianza mata al hombre. 他人を信頼すると殺される（ひどい目にあう）。（人を信頼するな。信頼できるのは第一に自分、第二に自分、第三に自分である、と言い切る人が多い。）

Cuanto más conzco a la gente, más quiero mi perro. 人々を知れば知るほど、犬が好きになる。（人は嘘をつき騙すが、愛犬はそうではない。主人にいつも忠実である。飼い犬は本当に可愛い。ほっとする。）

Madrugar antes de que te madruguen. 他人が自分を起こす前に自分から早起きする。（これは、早朝に早起きすることを指すことよりも、他人を出し抜くために早めに行動する、ことを指す。）

人に迷惑をかけても ¡No importa!（たいしたことはない）と片付けられる。人々が伝統的な賢さからが抜き出ることができないのは、第8図のように、堂々巡りしているからである。

相互不信と個人主義

ビベサ・クリオージャは個人主義の行き過ぎを、従って、他人の不信、互いの不信、相互不信、を含む。さらに、法の軽視ないし無視から、公衆道徳の衰弱ないし欠落をも、含んでいる。法の背後にある政府への不信は特に強い。役人にだまされてきた長い苦い歴史があり、国家に対する市民の信用は地に落ちている。

先進国では、政府と民間が一体となって協力することで発展が見られ

ト調査を2006年に行ったが、その結果は悲惨であった。150社のうちで回答してきたのはたったの1社であったからである。アンケート調査の質問はきわめて簡単なものであったが、担当者によると、アンケートの中に「従業員数と売り上げ高」を問う項目があったので、役所による内情調査とかんぐられたらしいとのことである。脱税や違法の発覚を恐れて、殆どの企業は回答しなかったのである。

日本では考えられないことであるが、政府不信の根強いアルゼンチンではこのようなことは当たり前のことである。従って企業も政府も情報開示にきわめて消極的であり、PR活動や広報活動は極めて貧弱である。

政府不信をめぐる悪循環を図示すると第9図のようになるであろう。よく見ると第2図ポピュリズムの悪循環と重なり合うところが多いことが分かる。

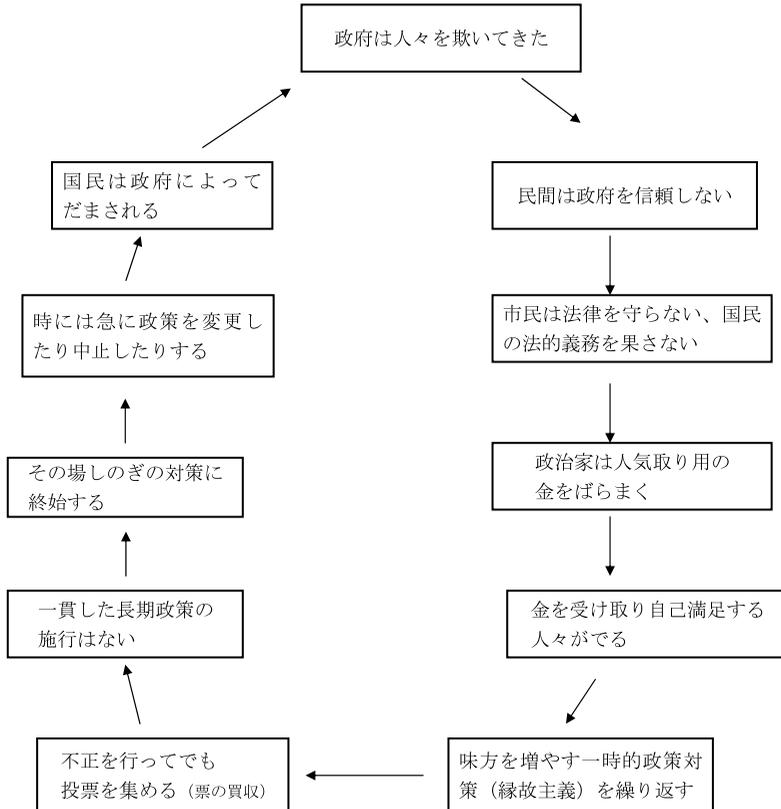
他人の不信や相互不信は個人主義の行き過ぎを引き起こす。2007年8月4日付けのラ・ナシオン紙 (La Nacion, Sábado 4 de agosto de 2007)²⁸⁾は第一面に

“Vivimos divididos, sin confianza en el otro y digregados” El filósofo José Luis Galimidi analiza el daño civil que causa el individualismo.

我々は相互不信に陥り、一緒に集まることなく、ますます分裂して生きている。哲学者のホセ・ルイス・ガリミディは、個人主義のもたらす市民的被害を分析する。

28) Agustina Lanusse, “Vivimos divididos, sin confianza en el otro y digregados. El filósofo José Luis Galimidi analiza el daño civil que cause el individualismo.”, La Nacion, 4 de agosto de 2007

第9図 政治不信の悪循環



という記事を載せている。その要点をここに引用する。彼の言葉を引用するに先立って

Hay pocas cosas que molesten tanto al filósofo José Luis Galimidi como el exceso de individualismo. Eso sostiene, nos lleva a estar desconectados unos de otros y a aceptar como un hecho comprobado que somos incapaces de agruparnos y construir una

comunidad.

アルゼンチンの個人主義の行き過ぎ (exceso de individualismo) ほど哲学者のJosé Luis Galimidi (ホセ・ルイス・ガリミディ) を悩ませる問題は他にはほとんどない。このため、国民は互いに分断され、国民の一致や共同体の形成が不可能になっている、

と紹介されている。

哲学者のJosé Luis Galimidi (ホセ・ルイス・ガリミディ) は以下のように述べる。

Cuando hay disgregación, el espacio se vuelve estratégico y deja de ser fiable. El otro ya no me representa, la cooperación está ausente, se corta la cadena contractual y las responsabilidades quedan limitadas a ciertas articulaciones locales: mi familia, mi grupo, mi fracción. El caos en el tránsito es una amenaza grave de la que no somos conscientes.

分裂があると人々の間に隙間が意図的に生じ不信がつのる。他人はもはや自分の代わりではなく、協力は無くなり、契約のきずなは切られ、責任は周りの限られた範囲 (家族, グループ, 分派) に限られてしまう。事態はますます「カオス」(caos, 無秩序, 大混乱) に向かっているが、この重大な脅威を意識している人々はほとんどいない。

行き過ぎた個人主義

社会の分裂の原因は行き過ぎた個人主義にある。法律を尊重する精神は欠如しており、立派な法律があってもそれは絵に描いた餅に過ぎず、

国民全体を律することはない。そもそも法律には実施細目や罰則規定が整っていない。一定の人々が集まって一つの社会を形成するのは、互いの約束事(法律)を守る場合であり、これはアルゼンチンの現状とは程遠い。政府も真面目に長年にわたって法律を施行する意図を有しない。大統領が変われば全てが変わる国である。

教育のような基本的制度が何の成果を生み出していないのは人々の相互不信がますます高まっているからである。互いを信頼するという土台が無い所で良い教育がなされるはずがない。

「カオス」(caos)

人々はますます他人を信頼できなくなっており、ノソトロス (nosotros, 我々という意味) の示す範囲はますます小さくなっている(私の家族, 私の友達, 私の政党, 私の仕事仲間)。他人のことを意識して生きることは少なくなってきたり、協力とか共同という言葉はますます聴かれなくなっている。事態はますます「カオス」(caos, 無秩序, 大混乱)に向かっているようにみえるが、この重大な脅威を意識している人々はどれほどいるだろうか。

Primero yo, segundo yo, tercero yo

真実を隠して生きることが日常になっている。正直さが必ずしも尊ばれない。うそをつくことが当たり前になると、無責任、独断、だましあい、相互不信がはびこる。約束を破るのが普通になる。頼りになるのは自分と身内しかない(既述のamiguísimo)と言うことになる。生きるうえで大切なのは「第一に私, 第二に私, 第三に私」であると言うのはビベサ・クリオージャそのものであり、その弊害は大きい。個人主義が行き過ぎると、他人を許容することがなくなり、「寛容の欠如」(poca tolerancia), 社会の取り決め(法律)の無視, 約束の不履行, などが生じる。嘘つきは社会の隅々までいきわたり, 小さな個人の段階から司法の段階まで腐敗や汚職が充満する。相互不信は協力の欠落, コミュニ

ケーションの不足，共同目標追求の欠如につながる。

結論的に，アルゼンチンの諸悪の根源は**司法の腐敗**にある，と言える。司法の腐敗はねじれた国民性（Viveza Criolla）と結びつく。公民意識の喪失，腐敗した司法，汚職の蔓延，制度の未発達，深刻な貧困問題，荒廃した教育，三権の未分立……すべての暗い部分は互いに絡み合いながら悪循環している。その絡み合いが解かれる可能性は見えない。

(2010年1月4日受理)

Summary

Vicious Circle in Argentina

—Viveza Criolla and National Disunity—

Kiyoshi ABE

Argentina is blessed with natural and human resources, but is beset with so many indigenous problems, being divided politically and stagnant economically. Why? Mainly because of the distinct nationality called Viveza Criolla.

Almost 200 years have passed since its independence in 1816, but there is still no real national unity in Argentina. People dislike cooperation. Their civic consciousness is low. Corruption is still rampant. Schools are falling apart due to the low moral level. No civic education is effectively offered at school.

The nation is never under the rule of law. Politics precedes, and interferes with, all others. There is no real division of the three powers according to the National Constitution. The result is infamous corruption of justice.

Back in 1925 said Albert Einstein, “no nation could develop, with such widespread disorders in the society, even if blessed with abundant resources.” His remarks still remain valid today. All the disorders of Argentina are fundamentally due to the Viveza Criolla, the sly and underhanded practice nurtured traditionally inside the country.

The roots of the Argentine decline reflect the lack of the civic consciousness both of the government and of the people, and the lack of

national goal or vision on how to survive in the age of globalization, all being related more or less to the *Viveza Criolla*. The enormous disorders of the society are typified by the corruption of tribunals (especially that of the Supreme Court). The corrupt judicial system paralyzes the morality of the people, which reflects the tragic distrust of the government by the people. No wonder, Argentina fails to develop fully into a modern democratic country.